愛と反逆

評伝・猪狩満直

新藤　謙

たいまつ新書49

たいまつ

著者紹介

新藤　謙（しんどう・けん）

1927年，千葉県に生まれる。
小学校卒業後，いくつかの職業を転々。思想の科学研究会会員。
専攻，大衆芸能を通した日本文化論。演歌調歌謡曲の旋律のなかに日常意識としての天皇制をみる歌謡曲論を展開。
著書に『現代の映像』(永田書房)，『流れ者歌謡考』(ブロンズ社)，『私説・戦後歌謡曲』(三一書房)，『百姓一代　評伝・平田良衛』，『土と修羅』(たいまつ社) などがある。

現住所，福島県いわき市江名風越46

愛と反逆　評伝・猪狩満直　　たいまつ新書　49　(青)

1978年12月10日　第1刷発行　　定価　680円

著　者©　新藤　謙
発行者　大野　進
発行所　株式会社たいまつ社
〒160 東京都新宿区百人町1—23—14
電話 03—371—1590
振替 東京 4—24362
印刷・厚徳社

〈落丁・乱丁本はおとりかえします〉　直接注文の場合，送料当社負担

たいまつ新書 49

愛と反逆 評伝・猪狩満直

新藤　謙

たいまつ社

目次

家の呪縛……五
酷寒地獄の詩……六
義父政一との確執……一一
キリスト教の受洗……一六
詩誌『播種者』の創刊……二四
北海道移住……四五
北の果てへの旅立ち……四六
苛酷な開拓生活……六一
小沼たかとの結婚……六六
更科源蔵との出会い……七八
雄別炭鉱での労働と詩集『移住民』……八八
『弾道』との論争……九九
やせていく田畑・営農の限界……一二六

離道以後……一三三
帰郷……一三四
三野混沌との再会……一三六
単身渡道……一三〇
はじめての養鶏……一四三
長野時代の短歌……一五五
政一との和解……一六〇
満直の詩及び社会観……一六五
詩的世界の展開……一六六
物語詩、客観的叙述詩の背景……一七三
キリスト教離反から無政府主義へ……一八五
古典的アナーキズムへの疑問……一九八
年譜……二一一
あとがき……二一六

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

家の呪縛

猪狩満直・十八歳

酷寒地獄の詩

寒いなんて
頭をちぢこめないで
雪の舞ふのをごらんなさい
きれいなこと　きれいなこと　きれいなこと

――「雪の日の詩」大正十二年

ずいぶんふぶくね父うちゃん
こんなに吹雪いたら小屋がのまってしまはないか
のまったって平気だよ
あした父ちゃんがスコップで掘ってやるよ。
だって小屋が泣いているだないか
ああ窓がみへなくなった。

泣いてるだないよ
歯ぎしりかんでるのだよ。
だってつぶれたらどうする。
小屋なんとそんな弱虫でないよ
はしらがづうと土の中にがんばってるんだよ
あら　あっこの穴から
つめていな
つめていなんて言ふもんぢゃないよ
つめていて言ふと余計に吹きこむんだよ
バカ野郎って笑ってやるもんだよ
だって冷たくてねむられねいだねいか
だから父ちゃんはさっきから言ってるぢゃないか
ぼうしか風呂敷をかむって寝なさいって
明日は止むかい
止むとも
明日はいいおてん気で

お日さんは
悪者の雪さんを
いぢめてくれるとさ
お日さんと
雪さんと角力とったら
どっちが負けるかね
ああ
みんなでねむろ
いち・に・さん

――「吹雪の夜の会話」昭和四年

雪を素材にしたこの二つの詩は、ともに福島県の百姓・猪狩満直の作品である。はじめの雪は、東北地方でもっとも温暖な福島県のいわき地方に舞う雪であり、あとの雪は、北海道の阿寒山麓に吹き荒ぶ雪である。

冬の風物詩の趣きのあるいわき地方の雪が、「きれいなこと　きれいなこと」と観照されることに、開き直って異をさしはさむいわれはないが、開拓小屋を埋めつくす阿寒山系の雪

にしては、あとの詩には、白い悪魔の恐怖と酷寒地獄のすさまじさが感じられない。

同じ詩人はその頃、別の詩で、こうもうたっている。

吹雪がおらの小屋をかっぱらいにきた
吹雪がおらの小屋をうちのめしにきた
おらは吹雪の吠ゆるのをききながら
小屋の中に寝て居る
堆づ高い藁床
豚のやうなおらだちだ
なんとしても胸の痛みがとれねい
子供はさっき血を吐いた
食物はなし
薬はなし永い夜
荒れ狂ふ吹雪め
板壁のすきまから
窓硝子の破れ穴から

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

吹雪はおらの目を塞いだ
吹雪はおらの口を塞いだ

――「吹雪の夜」部分

暗澹たる暮らしの実態をわたしはここにみる。にもかかわらず、「吹雪の夜の会話」には、絶望の叫びはない。地の底から響いてくる重たいうめきはない。むしろ、暗闇に、一条の陽の光がほっかりと差し込むようなぬくもりがある。春風のような和やかささえ感じさせる。

これが、吹雪におそれおののくこどもへの励まし、いたわり、という詩の内容からきていることに疑問の余地はない。おそらく、はじめて遭遇する北海道の吹雪は、詩人自身をもふるえあがらせたにちがいない。まして幼女には、生きた心地のしないものであったはずだ。そうであればこそ、こどもがいとおしく、あわれでならなかったろう。こどもへのいつくしみが、凄絶な題材にかかわらず、この詩を明るく、ヒューマンなものにしているのである。わたしはそこに、この詩人の心のやさしさ、こどもへの慈愛、繊細な感情をみる。皮肉なことに、じつはこの人間的資質こそが、猪狩満直を、温暖な郷里いわきから、飢えと寒さの北海道の八寒地獄に追い立てたのである。

義父政一との確執

猪狩満直は明治三十一年五月九日、福島県石城郡好間村大字川中子五ノ神（現いわき市）の農業・猪狩新吉、サタ夫妻の長男として生まれた。満直が生まれた頃の猪狩家の衰退は著しかったが、その昔は二町有余の田畑を持つ富農で、二つの用度蔵を構え、その屋根は、戊辰戦役で焼落した平城の瓦で葺いたものであり、平藩学者・大須賀筠軒や、自由民権家・広野広中の書も蔵されていることによってもうかがわれるように、村でも有数の名望家であった。いまの猪狩家は建ててからほぼ百年を閲するが、ひとかかえもある梁や柱に、昔の羽振りよさをしのぶことが出来る。朽ちた蔵と、枯れ泉水が、ひときわ人の世の栄枯盛衰を物語っている。

父新吉は少壮にして村の助役を務めたほどの器量人で、特に弁舌さわやか、談判を得意とし、嘆願や陳情では県知事に対しても臆するところがなく、村の発展に功績があった。温厚な人格は村民の信望を集め、村のもめごとにはいつも辞を低くして乞われ、見事な裁きを示したという。明治三十二年八月五日、三十二歳の若さで病没したが、村人達は、「あの人をもちっと生かしておきたかった」、とその死を悼んだ。もっともこれは満直が書いているこ

とで、父親美化の心理もはたらいていることを勘定に入れなければならないが、村の逸材であったことはたしかである。

この時、遺児となったのは満直と姉三人。母サタの細腕一つでは到底一家の暮らしを支え、こどもたちを養育してゆくことは出来なかった。親族会議が開かれた。もっともいい方法は、サタが新吉の弟政一と逆縁を組むことであった。こうすれば猪狩家の血の純粋性は保たれ、家系の連綿が維持される。障害となるのは、サタが政一よりも七歳も年上である、ということである。おそらくこの場合、サタの意志は問題外であったろう。嫁には発言の権利も、選択の自由もない。離縁されないだけでも幸せといわねばならない、というのが、当時の農村の、いや農村だけに限らず、日本社会における嫁の置かれていた位置であった。事実、サタもまた追い立てをくう寸前までいった。したがって、再婚の相手を嫁の自由意志によって決める、などということは思いもよらぬことであった。仮に意中の男がその家以外の者、ゆかりのない他人であるとすれば純血が濁る。それは血縁による紐帯が切断されることであり、家族制度の秩序が破壊されることを意味していた。到底容認出来るものではなかった。

唯一の標的は政一であった。政一をさえ口説き落とせば、サタは強引に言いふくめることが出来る。こうして政一が生け贄の祭壇に上るのである。猪狩家にとって幸いといおうか、政一の両親は息災であった。両親は息子に、この際、家のために何も言わずサタと縁組して

くれ、と懇願したにちがいない。二十歳の政一には、それを断り通すことは至難なことであった。経緯はどうであれ、日本の家族制度のもとでは、その呪縛から逃れることは出来なかった。わたしの両親もまたそうであった。家のためという大義名分が、あらゆる希求や願望をからめとってしまうのである。家のためなら苦界に身を沈めることも出来る。家のためなら恋もあきらめることが出来る。その苦難を生み出すものも家であり、その苦痛をやわらげるものも、また家なのである。これは自分の意志によるものではない、それによって誰かが救われている、と考えることが自己救済なのである。自己愛はそうして生まれる。そこにわたしは、家のもつ魔性と呪術性をみる。

サタがその意志を、はじめから認められなかったという点で、家の犠牲者であるとするならば、政一もまた、日本家族制度の、まがうかたなき犠牲者であることは明らかである。悲劇の根はここに胚胎していた。

政一も兄と同じように助役をし（選挙管理の不手際で辞職）、後年は村会議員になったほどの人物であり、該博で才気煥発であったというから、若者特有の高遠な理想も、夢多き生活設計もあったはずである。まして政一には好きな女もあったのである。それが挫折したばかりでなく、二十歳にして一挙に、七歳も年上の女の夫となり、四人のこどもの父親となったのだから、無念と屈辱、不満と自嘲によって、心中絶えず穏やかならざるものがあったであろ

う。その捌け口は、もっとも弱いサタに向けられていった。「蹴られ、なぐられ、髪の毛をとってするびかれ」たことも数限りなく、骨まで凍りつく真冬の庭に、むしろをかぶって夜を明かしたことも幾度かあったという。家の体面を保つために強制された愛情のない結婚であってみれば、うまくゆく道理はなかったのである。

新吉が死亡したのは満直が生まれた翌年で、もちろん満直には父の記憶はない。かれは政一が実の父親だと思っていたのである。かれが自分の出生の秘密を知ったのは、小学校六年を卒業する間際であった。県立磐城中学を受験するため取り寄せた戸籍謄本をみて、満直はわが眼を疑った。自分が木田弥平、カヤの二男として、猪狩家に養子入籍していたからである。自分ばかりではない、三人の姉もみな政一の養女となっていた。親族会議は、政一の戸主権を明確にするため、遺児四人をいったん異なる親戚に養子として入籍させ、そこからさらに猪狩家に養子として再入籍させたのである。ただし、政一とサタとのあいだに出来たこどもは、猪狩家の相続人にはしない、という申し合わせがなされた。このような煩瑣で姑息な手段をとらざるを得なかったところに、日本の家族制度の総毛立つ恐しさと不純さ、猥雑さがあったのである。

人間の誕生の日は悦びであるのか
——悲しみであるのか

今日も自分は泣かなければならなかった

満直は何度も自分の運命を呪ったことだろう。出生の秘密がわかってしまえば、政一をみる眼も、以前とは違ってくる。そのことにこだわれば、こわばりとなって表面に出る。父との関係は円滑さを失い、ちぐはぐなものになる。そういえばあれもこれも、思い当る節がある、と父らしからぬ振る舞いもあったであろう政一に、ますます不信の眼を向ける満直であった。政一もまた、そういう満直を心から愛することは出来なかったはずである。それにいかに才気煥発であり、相続に対する付帯条件があるとはいえ、一人の親の人情として、政一は実のわが子を相続人にしたかったにちがいない。それを妨げている満直を心よく思うはずはない。政一にとって満直は、たえず自分についてまわる影であり、自分の存在をおびやかす気掛りなこどもであったろう。

それでもまだ満直がこどものうちは、たがいの胸にわだかまる違和感はそれほど大きなものではない。溝もさして深いとはいえない。が、満直の成長に従って、違和感は憎悪となり、ぎくしゃくした関係は、激しい対立にまで拡大してゆくのである。

自我の自覚とは、人間が親や家から独立してゆく意識、一個の人格の旅立ちである。親の価値観や、家や集落の規範と秩序に従って来た人間が、従い得ないものを自分のなかに発見し、そこから抜け出ようという意欲である。それは人間の尊厳に目覚めることでもあるが、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton